

まんだら通信

第243号 (通巻277号)

平成28年10月 西暦2016年 佛暦2582年 皇紀2676年

安房国八十八ヶ所 第一番札所
295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高栴 龍沙
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org

東光院の御前さま

「Aさんという先輩がいます。成田市の近くのお寺の住職をしています。以前は余り魅力ある人じゃなかった。そう思っていたんですよ。」

そのAさんが二十年ぶりにひょっこり訪ねてこられました。

まずビックリしたのはですね、見違えるように穏やかで福々しい様子、血色の良いお顔になっていたことです。

そして、お茶を勧めると何やらブツブツ、お菓子をどうぞと

いうと、また口の中でブツブツ言っているんですよ。私、聞きました。

先輩、さつきから何をブツブツ言ってるんですか、ってね。そしたらね、あ、これが、これはね、有り難いご真言なんだが、いわれをお聞かせしようかね、と喋り話してくれました。

先輩が御師様から任された初めての所は、お檀家五十軒の貧乏なお寺だったそうです。これではとても生活できないと、近くの農協に勤め始めたんだそうです。今は知りませんが、その頃は給料が安くて、余り暮らしの足しにならなかったそうですよ。

縁あって、山梨の大きなお寺の娘さんと結婚したんだそうですが、こんなはずじゃなかった、帰らせてもらいます。という話になってしまつし、そのうち子どもが出来て益々身動きが取れなくなり、昼も夜もいさかいが絶えなかつたんだそうです。

そこへAさんの先輩が来まして、あんだ達そんなことじゃいけないよ。まして君は衣をまとおう坊さんじゃないか。

私が、幸せになるご真言を教えるから実行することを約束しなさい、と喋り話したのが『有難いこっちゃ、結構なこっちゃ』なんだそうですよ。

Aさんはね、有難くもない、結構でもないのにそんなこと言えるか、と初めは思ったそうですよ。先輩はね、俺も君とおんなじだったから、他人事とも思えない、だから教えるんだよ、と言ったそうです。

奥さんは、当てつけみたいにいやらしい、って文句を言ったそうです。でもAさんは、生まれつきの頑固さと、先輩との約束もあって、この『有難いこっちゃ、結構なこっちゃ』を続けたそうですよ。



すよ。

そうして五年過ぎたとき、別のもう少し大きなお寺の住職になったそうです。この辺りから運が開けたというのか、生活が段々と良いほうに向かっているって、今では毎年外国に行けるようになって、もう大抵の国には行ったそうですよ。

もつとも奥さんは、あんな重いものが飛ぶなんて、私はご免ですって言って、まだ外国に行ったことはないんだそうですよ。どうですか皆さん。

問題はね、良いと思っただことは続けることが大事なんです。そうすれば、必ず運が開けます。実行している私が言うのだから間違いないことなんですよ。」

お施餓鬼の時に、先年亡くなられた丸山東光院の御前さまにQ2法話をしてもらっていました。平成十四年『有難いこっちゃ、結構なこっちゃ』という題でお届けしたお話の再掲です。

くどいようですが、もう一度戦争の話です

先月号で、大東亜戦争について、本当の意味での戦犯は、アメリカ大統領ルーズベルトですと書きました。

歴史の資料を読めば分かる通り、止むにやまれず立ち上がった戦争ですが、日本人は世界でも珍しい、潔癖で公平を大事にする国民ですから、『それではお前は、他国に攻め込み、罪のない人たちが死んだことに責任はないというのか』という人が必ず現れます。まして、坊さんが人殺しを勧めていいのかわかると、非難の声が聞こえてきそうですよ。

『自分に引き比べ、殺してはならない。殺させてはならない』はお釈迦さまの言葉です。マカダ国は、シャカ族を滅ぼそうと軍を進めました。お釈迦さまは止めてもらおうと、王様を説得しました。王様は自分が帰依するお釈迦さまの言い分を二度までは聞きましたが、三度目の侵攻でシャカ族は全滅しま

した。あれから二千五百年、世界中から戦火の絶えることはありません。現実の世界では個人の善意と民族感情は、同じではないからです。

開国して明治になった時、アジア諸国はすべて白人国家の領土になっていました。

日本は独立を守るため『富国強兵』、『殖産興業』を旗印に、明治天皇や政府以下一般国民まで、重税に甘んじて働きました。

そして大東亜戦争。

「戦わない方法があった筈だ。」という議論は当時もありました。お気持ちとしては昭和天皇もそうだったそうですし、近衛首相や吉田茂さん、当時のジョセフ・グルーアメリカ駐日大使も大変な努力をしたそうですが、それは別問題です。

ともあれ日本の降伏と同時に進駐してきたアメリカ軍は、日本人の精神的骨抜きに取りかかりました。「日本国民は、間違った指導者によってひどい目に遭った。これからはアメリカのような明るい民主国家にならねばならない」という触れ込みで、色々の政策を実行しました。

その仕上とも言うべきものが『東京裁判』ですね。「国際法に違反した田舎芝居」というのが世界的に正しい言い方ですが、効果は抜群でした。あれから七十年経つのに、この歴史観が正しい、と思っっている日本人がいるというのが何よりの証拠です。

何れにせよ、何が正しいかは歴史を理解することから始まります。そのための資料は先月号に書きましたが、ここでは『もう一度学ぶ 日本史』(育鵬社)をお勧めしたいと思います。文科省検定の歴史教科書を一般の人に読みやすく編集したもので、縄文時代から現代までを興味深く書いてあります。

悲惨な戦争を再び繰り返さないためにも、自分たちの過去の有り様を正しく知ることは大切なことだと思います。それは私たちの子孫への義務であり、世界の平和のためにも必ず役立つことだと思います。

にっぽん人情小噺 三遊亭鳳豊
第一二九話 タヌキ

小池都知事、がんばっていますねえ。
海の向こうでは、ヒラリー・クリントンさんが、メルケルさんが、スーチーさん、パク・クネさん、イギリスの新しい首相も女性だそうですね。政治の世界だけじゃありませんよ。

いま、テレビ番組を見ても、女性のキャスターやコメンテーターのお顔を見ない日はないでしょう。先のオリンピックでも、レスリングの女子選手たちの活躍には、驚きましたものね。そうそう、最近の芥川賞、直木賞も女性の名前がない時はないくらいです。ともあれ、女性が様々な世界で活躍する時代になってきました。

実は、女性ががんばっているのは、人間の世界だけではなく、動物のタヌキの世界でも同じだそうですね。

ある村で、タヌキのリーダーを決める選挙があり、いつものように、長老のタヌキジジイが無投票で当選するかと思ったら、一匹の若いメスのタヌキが突然、立候補して、大騒ぎになったそうです。

對抗馬ならぬ對抗タヌキのそのメスが、これがまた初々しいだけでなく、言っていることがいちいち正しいのだそうで、「タヌキの待機児童問題」とかタヌキの高齢化問題の解決を公約に掲げ、これまでドンの言いなりだった一般のタヌキ達も「そーいやあ、そーうだ」と声を挙げるようになったということです。圧倒的大差で若いメスが新リーダーになりましたよ。負けたドンは、暫くはショックの余り、タヌキ寝入りを決め込んだとか。それにしても、どうしてこんなにも優秀な若いメスのタヌキが登場したのか。それはこのメスのタヌキが大学卒だったからと言われています。

どんな大学か、わかりますか。二年制の女子タヌキ(短期)大学だそうですよ。
まあ、冗談はさておき、宮城県で実際にあった話をご紹介します。

主人公は、タヌキです。酒井光江さん(仮名)は八十二歳、ひとり暮らしです。夫は十年前に亡くなり、ネコの「クロちゃん」と毎日を過ごしながら、

田畑を耕して生活していました。そんな静かな毎日を、あの東日本大震災が襲ったのです。

激震で庭の納屋は壊れましたが、なんとか母屋は大丈夫でした。光江「ばっばちゃん」が住んでいたところは、まわりが山に囲まれているので、津波の被害は逃れました。しかし、「ばっば」は大地震後、ものすごい寂寥感に襲われました。

それは、唯一の家族であり、「ばっば」の話し相手でもあったネコの「クロちゃん」が地震に驚いて、姿を消してしまっただけです。「ばっばちゃん」は、春になって畑に種を蒔きながら、「クロちゃん」「クロちゃん」と山に向かって呼んでみました。

しかし、桜も散り、山々が新緑に覆われるようになってからも、「クロちゃん」は現れませんでした。

そんなある日のこと、「ばっばちゃん」の勝手に一匹の子ダヌキが、ピヨコタンとお座りをしていました。「クロちゃん」がいなくなった寂しさから、「ばっばちゃん」はその小さなタヌキに、餌をくれたのです。すると、そのタヌキが毎日、来るようになりました。

「ばっばちゃん」はそのタヌキを「たん子」と呼び、とてもかわいがりました。その昔、「たん子たん吉珍道中」というタヌキを主人公の映画があったからです。主演は、松島トモ子、小畑やすし……。ご存知の方、いらっしやいますか？

ああ、そんなことはどうでもいいです。話の続き。

「ばっばちゃん」が「たん子」に餌をやりだして、二週間後、それこそ「ばっばちゃん」が腰を抜かすような出来事が起こりました。なんと、勝手口に「クロちゃん」が座っているじゃありませんか。それも、「たん子」といっしょに。

「クロちゃん、クロちゃん……」。ばっばちゃん「はもううれしくて、「クロちゃん」を抱きしめました。少し痩せて、からだも汚れていましたが、両足の先が白いソックスを履いたような「クロちゃん」に間違いはありません。

「そうか、たん子が連れて来てくれたんだね。」

ありがとう、たん子」
そう言っつて、その日は特別に鶏肉をたん子にやりました。たん子は、おいしそうに食べていたそうです。

光江「ばっばちゃん」に幸せが戻ってきました。しかし、不思議なことに、「クロちゃん」が戻ってきた時に鶏の肉を食べて以来、今度は「たん子」の姿が見えなくなったのです。

「クロちゃん、たん子とどこで知り合ったんだい？ 遊びに来るように伝えてね」

「ばっばちゃん」は、「クロちゃん」に話しかけるのですが、それ以後、まったくタヌキの姿はありませんでした。

やがて、「ばっばちゃん」にとっても忙しい収穫の秋がやってきました。八十歳を超えての穫り入れは大変です。そんな夕方、「ばっばちゃん」はなんと畑でイノシシと出くわしたのです。

体長が一メートル半のイノシシが、「ばっばちゃん」に牙を向けて三メートル先に立ち尽くし、いまにも猪突猛進「ばっばちゃん」に向かってきそうな雰囲気でした。

「ばっばちゃん」は悲鳴を上げました。ですが、遠い山の上です。誰も助けに来てくれませんでした。「ばっばちゃん」は覚悟を決めました。

その時でした。どこからともなく、二匹のタヌキが飛び出してきて、「ばっばちゃん」の前でイノシシと向き合ったのです。まるで、「ばっばちゃん」を襲つたら、「俺たちを食い殺してからにしろ」と言わんばかりの迫力です。

「ばっばちゃん」も息を飲んだその瞬間、イノシシは向きを変え、トコトコと走り去っていったそうです。

「ばっばちゃん」が我に返ると、そこにはタヌキの姿はなかったそうですよ。

「誰も信じてくれないでしょうけど……」と言つ、友人の仙台市に住む管理栄養士、國永満智子さんから、つい最近、この私が実際に聞いた話です。

今月の人情小噺も、MOKU出版と三遊亭鳳豊さんのご好意で10月号からの転載です。



▼ポケモンゴーとか言うゲームが爆発的に流行りました。趣味とも言えないものがいつまで持つかと思っていたら、案の定近ごろはもう話がありません。趣味というならミニ盆栽とか俳句なら分かるのですが。▼今月の野草はヒガンバナ(曼珠沙華)【ヒガンバナ科ヒガンバナ属】この季節、何回か取り上げましたが、矢張り外せない野草です。稲と一緒に大陸からきたものだろうということで、球根でしか増えないので、人間の手で広まったと考えられるそうです。全体に毒があるので注意が必要だそうですね。

2016.10.09 龍渉

▼一今年もあと2ヶ月。光陰矢の如しとは全くその通りです。それにしても私、この1ヶ月、ただウロウロとしていたような。▼近ごろ聞かなくなった『灯下親しむの候』。スマホやインターネットばかりで、影が薄くなったのかも知れませんが、文字を読むことは頭の体操には一番ですね。▼今月も1ページ目の写真は、数年前のスリランカ成田幼稚園での点景です。日本から持参のあめ玉を配っているところで、あちらにもあるのですが、『日本の』というところがいいのですね。▼ひそかに心の先生と仰いでいる曾野綾子さん。物事への目の付け所にいつもハッとさせられています。85歳ぐらいだと思いますが、ご

主人三浦朱門さんは90歳。歳相応に身体は弱っていますが、病気ではないので一緒に暮らしています。ご主人は喜んでくれるそうですが、曾野さんに言わせると年寄りが増えれば、国だって面倒を見るのが大変になる。家族が出来るならそうすることが国家のためだと思うからです、と。8月15日の終戦の日には、靖国神社参拝が恒例だそうです。不自由な身体でお参りしたそうです。社前には高校生、おじさん、おばさんと、色々な人が国のために殉じた人に深い敬意を捧げているのを見ると、それは間違っているという人に対して、それをはねのける権利があると言わざるを得ない、と

余滴